

宮城県ダイバーシティ支援センター便り

宮城県ダイバーシティ支援センター主催
医学生・研修医支援セミナーの報告

宮城県医師会常任理事

宮城県ダイバーシティ支援センター副センター長

福 興 なおみ

令和7年度の医学生・研修医支援セミナーは、宮城県医師会館での現地開催とオンラインのハイブリッドで3回開催されました。第1回は2025年5月28日（水）、第2回は2024年9月24日（水）、第3回は2026年1月21日（水）で、参加人数はそれぞれ42名、52名、38名でした。5月と9月のセミナー後には飲食を交えた懇談会を開催し、それぞれ38名、47名の医学生・医師が参加しました。近年の参加男女比は1：1くらいになっていましたが、今年度の参加者の男女比も、ほぼ同数でした。これは、男女関係なくキャリアについて考えるきっかけにしたいという本セミナー開催の趣旨が、皆さんに浸透しつつあると理解しています。昨年度ダイバーシティ支援センター（旧名称：女性医師支援センター）に名称を変えた開催側として嬉しく感じました。

いずれのセミナーも、宮城県医師会佐藤和宏会長の挨拶に始まり、橋本省ダイバーシティ支援センター長からは本セミナーの主旨が紹介されました。センター長である橋本先生は、常々「女性医師支援センターという名ではあるものの、女性医師のみならず、性別にとらわれない医師全体の支援が目的」とこれまでのセミナーで説明してきました。今年度も名実ともにダイバーシティ支援ということが紹介され、その後シンポジウムと続きました。また3回とも、シンポジウムの後、佐藤和宏会長から「日本の医療を考える」というテーマで、本邦における医療費の現状と課題を話していただきました。日本の医療保険の仕組みから現在の病院経営の実態まで、医学部では教えてくれない、しかし医業を行う上で避けては通れない非常に重要な医療費の話をお聴くことができて、医学生や研修医にとって大変有益だったと思います。医学生や研修医はこれまでと違った視点で医療を見直すのではないかと思います。

第1回のセミナーは、シンポジウムと特別講演（佐藤和宏会長の「日本の医療を考える」）で構成されました。シンポジウムでは、本支援センター委員であり、みちよレディースクリニック院長の倉片三千代先生の座長のもとで、お二人の医師にご講演いただきました。お一人は東北医科薬科大学病院血液・リウマチ科の専攻医である藤田健資先生で、「空白のアイデンティティ」という演題名でした。医学部卒業後に急に選択肢が広がり、何を選ぶのか正解のない問いに直面したときの対処法について、ご自身の経験を交えながらお話しくれました。選択肢に悩むことは、「自分には何が向いているのか」「どう生きたいのか」とあらためて自分に向き合う大切なことである、という藤田先生の言葉は、医学生や研修医が人生の節目節目で思い出す言葉になると思います。もうお一人は東北大学病院婦人科の竹澤美紀先生で、「産婦人科で築く 私らしいキャリアとライフ」という演題でした。専門医取得後の妊娠・出産、そしてその後の子育てと仕事の両立における多くの支援の大切さと産婦人科の魅力についてお話しいただきました。ライフイ

ベントを経験する中での苦勞と困難がありながらも、常に向上心をもって精力的にすべてのこと（産婦人科学の臨床の楽しさと学問としての興味）に取り組む竹澤先生のお話により、女子医学生はまさに理想のロールモデルと感じたことと確信しています。

第2回のセミナーは、シンポジウムのほか、おおしろファミリークリニック院長の音羽孝則先生にお話しいただきました。シンポジウムでは、本支援センター委員で東北労災病院呼吸器外科部長の保坂智子先生の座長のもとで、東北医科薬科大学病院臨床研修医の巽夕夏先生から「研修医から専攻医へ～私が進路を選ぶまで～」、東北医科薬科大学病院心臓血管外科専攻医の鈴木法彦先生から「心臓血管外科で東北地方に貢献するために考えたこと・考えようとしていること～今±5年間～」と、それぞれの演題でお話しいただきました。巽先生は、医学生時代のさまざまな経験を通して、学ぶ楽しさや医師のやりがいを実感したそうです。明るく聡明な巽先生の医学生時代が、皆さんの目に浮かんだのではないのでしょうか。そんな巽先生も、初期研修選りや選り診療科では悩みが多かったとのことでした。そのような時は改めて、「自分がどうなりたいか」を考えることで進むべき方向が見えてきた、という巽先生の話に、医学生や研修医は、共感とともに希望を実感できたと思います。鈴木先生は、ご自身の医学生時代と研修医時代を振り返り、おおむね予想通りだったこと、そうでないことがあったことに気づいたと話してくださいました。特に、過去5年間はcareer designの大きな分岐点を通してきたといえる、とのことでした。このお話から、たとえ苦悩に満ちた現在の状況も、後で振り返るとすべて意義深くなるということをお話してもらえた、と医学生や研修医は感じたのではないかと思います。

第1・第2回のセミナーでは、シンポジウムと特別講演の後、会場を変えて質疑応答と情報交換を行いました。医学生からシンポジウムの講演者に直接質問できるコーナーでは、医学生からの多彩な質問にどのシンポジストも丁寧に回答くださり、質問者のみならず参加者全員にとって有意義な時間となりました。年代や診療科を超えて、男女関係なく働きやすい、働き続けられる、そして自分なりのキャリアを積むにはどうしたらいいか、いろいろな考え方やキャリアがあることを、先輩医師に熱心に聞いている姿に、これからの宮城県の明るい医療を期待できると思いました。

第3回のセミナーでは、本支援センター委員で東北大学病院輸血・細胞治療部准教授の藤原実



令和7年9月24日セミナーの様子

宮城県ダイバーシティ支援センター

名美先生と東北労災病院呼吸器外科部長の保坂智子先生のお二人の座長のもとで、東北医科薬科大学病院臨床研修医の善積亮太先生から「研修医から見た整形外科」、東北大学大学院医学系研究科血液内科学分野大学院生の小松弘香先生から「選択を重ねてきたこれまでと、これから」、東北大学病院呼吸器外科助教の熊田早希子先生から「キャリア形成における迷いと決断 —外科医10年目の経験から—」と、それぞれの演題でお話いただきました。善積先生は、中学高校時代に打ち込んだハンドボール部でのけがを契機に整形外科を目指すようになり、医学部時代の講義や実習を通じて実臨床に触れるなかで、整形外科への興味がさらに強まった経緯をお話してくださいました。整形外科の魅力ややりがいに加え、学生時代から現在に至るまでの進路選択の考え方を紹介してくださり、参加した医学生や研修医の進路選択の大きな助けになったと思います。小松先生は、かなり早い段階で専門医を取得し大学院に進学した経緯を紹介してくださいました。でもそれが正解なわけではなく、実際にはさまざまな選択肢があり、大切なのは、多くの先輩の話を聞きながら、自分自身の価値観やライフプランに合った道を主体的に考えていくこと、というお話は、医学生と研修医にとって印象深かったと思います。熊田先生は、外科診療に従事する中で多くの迷いや葛藤があることをお話してくださいました。そしてその時できることに全力で取り組んできた中で、時に休息やペースを落とす時期があってもよく、また性別に関係なく自分なりの働き方を模索していいことに気づいたことを紹介してくださいました。これからのライフイベントと仕事の両立を不安に思う医学生や研修医にとって、心に残るメッセージになったと思います。

お忙しい中、ご講演を引き受けて下さった先生方、座長の先生方ありがとうございました。そしてなにより、参加して下さる方がいなければ、セミナーは存在しません。お忙しい中、参加して下さった聴衆の皆さまにお礼申し上げますと同時に、本セミナーが明日からの皆さまの活動のモチベーション向上につながれば大変うれしく思います。
